



第19回 発掘レポート最前線！

—令和6年度北九州市遺跡発掘報告会—

日時： 令和7（2025）年3月2日（日）13：30～15：30

会場： 北九州市立生涯学習総合センター 3F ホール

（〒803-0811 北九州市小倉北区大門一丁目6番43号）

〈プログラム〉

- | | |
|-------------|------------------|
| 13：00～ | 受付開始 |
| 13：30～13：35 | 開会挨拶 |
| 13：35～14：15 | 報告①貫・裏ノ谷遺跡第2地点4区 |
| 14：15～14：20 | 質疑応答① |
| 14：20～14：30 | 休憩 |
| 14：30～15：20 | 報告②旧門司駅舎跡2区 |
| 15：20～15：25 | 質疑応答② |
| 15：25～15：30 | 閉会挨拶 |



1. 貫・裏ノ谷遺跡第2地点4区

1. はじめに

貫・裏ノ谷遺跡第2地点4区は、小倉南区大字貫に所在する遺跡です(第1図)。発掘調査では、丘陵の先端部に墓地が確認され、多数の墓坑(土葬による墓穴)・墓石・人骨・副葬品が出土しました。墓石に刻まれた没年や出土遺物から、この墓地が中世から近代にかけて連綿と営まれたことが分かりました。また、一部の人骨は全身が良好に残っているものもありました(第6図)。

2. 発掘された墓地の概要

調査区の全域で確認された墓坑は、全部で127基です(第2図)。墓坑の形は円形・小円形・長方形など、複数の形態が見られ、これらは死者を納めた棺桶の形や、被葬者の体格(大人と子供で墓坑サイズが異なる)に合わせていると推測されます。

墓坑の位置を見ると、調査区に中心から南側に異常な集中が確認できます。一部の墓坑は、古い墓坑を掘り込んで作られており、これらは何らかの理由で墓坑を掘削するエリアにルールが設けられていた可能性を示しています。

最も人骨が良好に残っていた32号墓では、ほぼ全身の骨格が残存しており、頭蓋骨には歯がしっかりと残っていました(第6・7図)。

墓坑からは、火葬骨を納めた骨壺や陶磁器の碗、三途の川の渡賃とされる六道銭など、当時の習俗を示す遺物が出土しています。

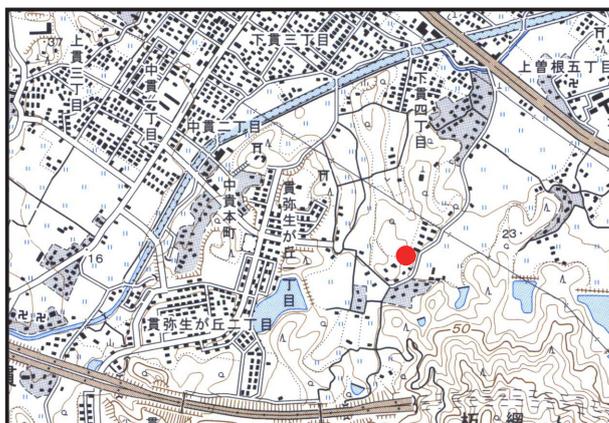
3. 墓石の変遷と被葬者の比率・名前

出土した墓石は全部で36基で、大半は改葬によって1ヶ所にまとめられていました(第3図)。これらの集積地点には「黒水先祖塔」と刻まれた石碑が立てられており、墓地の関係者が分かります。また、確認された墓坑の数と比べて非常に少ない状況です。この理由として、墓石を持たない人々が多く埋葬されている可能性と、改葬時に墓石が持ち出された可能性が推測されます。実際に15号墓からは、改葬時に廃棄された骨壺がまとめて出土しています(第4図)。

最も古い墓石は、刻まれた没年が1632(寛永9)年1月14日のもので(第5図)、この約1ヶ月前は小倉藩主細川忠利は肥後に転封している時期に当たります。これとは逆に、最も新しい時期の墓石は1878(明治11)年のものでした。これらの墓石の形は、17世紀から19世紀(明治時代)にかけていくつかの形態的な流行を経て、現代の墓石に近い方柱状の墓石へと変遷していきます。

墓石の年代からは、少なくとも江戸時代前期から明治時代まで連綿と墓地が営まれていたことが分かります。

墓石には、信士・信女・童子・童女・法子・定尼・定門な



第1図 遺跡の位置：赤丸(1/25,000)



第2図 遺跡の全景写真(左が北)



第3図 改葬時の墓石集積状況(北から)



第4図 改葬時に廃棄された骨壺や墓石(15号墓)

どの戒名かいみょうが刻まれており、被葬者の性別せいべつなどが分かります。一部の墓石には「浦黒水」と記されており、おそらく浦ノ谷の黒水家を示しているものと考えられます。

これらの墓石情報から被葬者の男女比を見ると、全体で男性12人・女性19人・男子7人・女子3人の合計41人が最低でもこの墓地に埋葬されたものと言えます。

4. 最古の墓 -中世武士 黒水氏の墓所-

調査区の南側に、直径約2mの大きな墓坑を掘り、その中心に備前焼の大甕を埋葬している墓(106号墓)が見つかりました(第8図)。この大甕は形態的特徴から、15世紀中頃～16世紀前半頃に生産されたものと分かります。これにより106号墓がこの墓地で最古の墓であることが判明し、墓地の始まりが中世さかのぼに遡ることが確定しました。また、106号墓の周囲には五輪塔の部材が散乱していたことから、106号墓の上に立っていた可能性もあります。

このような甕棺かめかんを用いた墓地を営む人々は一体どのような階層でしょうか。その答えは、墓石に名前が刻まれていた黒水家にあります。文献等によると、黒水氏は貫氏と共に中世の貫地域を治めていた武士の一族で、ちょうどこの墓地が作られた時期前後に貫氏と婚姻関係こんいんかんけいを結び、この地域に本格的に進出します。隣接する1区の調査では、106号墓と同時期と推定される屋敷を囲む溝や、茶器の天目碗、青磁輪花鉢などの高級陶磁器が出土している点からも、有力者の存在が浮かび上がります。その後、黒水一族(本家?)は中世末期の戦乱によって滅亡したとされています。

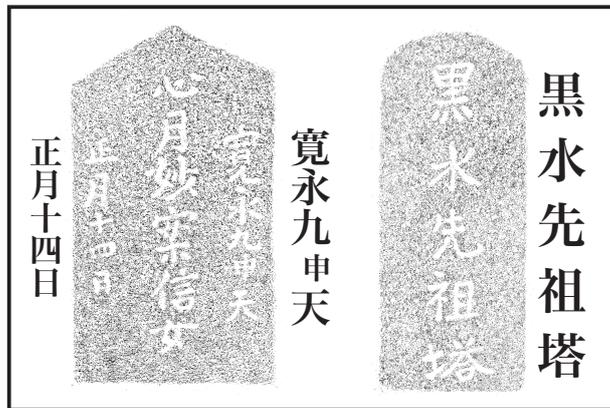
以上の文献史料と調査成果を合わせると、この墓地が中世武士黒水氏によって開かれた可能性が推測できること、文献上は滅亡したとされる一族が、近世にその命脈を保ちながら、現在まで続いていたことが判明したと言えます。

5. おわりに

墓地は開発されることが少ないため、発掘調査はあまり行われることがありませんが、北九州市ではこれまで小倉城下町の武士階級の墓や、小倉南区の農村部に営まれた村の墓地など、調査事例が多く積み重ねられています。今後の課題として、社会的階級の異なるそれぞれの墓地の構造や墓坑の配置、副葬品の違い、人骨を比較することで、武士階層や町民層、農民層などの生活・栄養レベル、病気等、様々な角度から当時の社会を復元することができます。

調査によって、貫・裏ノ谷遺跡第2地点4区は、中世から近代にかけての長期間に連綿と営まれた墓地だったことが分かりました。そして、その墓地の始まりは中世後期にまで遡ることも明らかとなりました。

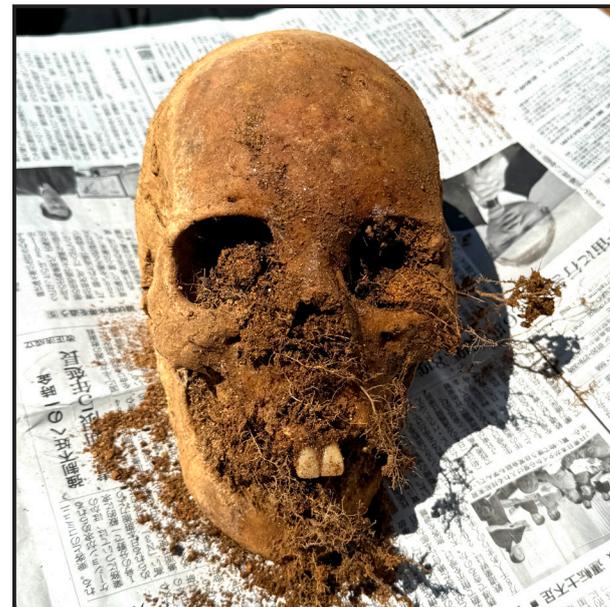
また、墓地開始期の15世紀中頃～16世紀前半頃と、近世に入り墓石が作られる17世紀前半までは、墓地形成が一旦途切れるように見える状況があります。この動向は、まさに中世末期に一族の本流が衰退ほんりゅう すいたいしていき、生き残った一族が江戸時代に再び墓地を営み始めた様子が現れているように見え、中世から近世への社会変化を知る上で、非常に興味深いところさきょうみぶかです。



第5図 1632(寛永9)年の墓石と黒水先祖塔の拓本



第6図 32号墓 人骨出土状況(北から)



第7図 32号墓 出土した頭蓋骨



第8図 106号墓 備前甕出土状況(西から)

2. 旧門司駅舎跡 2 区

1. はじめに

本遺跡は門司区清滝^{きよたき}二丁目4番に所在します。遺跡の北西にJR門司港駅、南西には旧九州鉄道本社屋（九州鉄道記念館）があり、それぞれ100mほどの距離に位置しています。昨年度（1区）の調査では明治24年（1891）に開業した旧門司（現門司港）駅の構内に位置していることが確認され、開業当初に設置された機関車庫（1号建物）や近代の遺構群、近世段階に遡る石垣などが確認されています。

2. 旧門司駅舎跡 2 区の調査内容

今回の調査区では、石垣9面・布基礎状遺構7条・煉瓦遺構13箇所・基礎15基・コンクリート柵3箇所・コンクリート柱5本・土管2本・鉄管2本・土坑3基・溝3条など多くの遺構が確認され、そのほとんどが近代の遺構です。

旧門司駅には明治から昭和期にかけて作成された地図や図面等がいくつか残されており、そこには多くの建物や構造物が記されています。このうち、『明治三十年十一月師団対抗演習記事附図及附表付』、『門司駅構内図平面図』（大正5年頃）、『門司（港）駅水道平面図』（昭和8年）などは比較的精度の高い図面です。これらは、全てではありませんが、調査で検出された遺構と対応させる事ができました。これらと比較することによって、今回は4棟の建物を確認することができました。確認された建物は、3号建物が大正期の「油倉庫」、5号建物が大正～昭和期の「倉庫」、6号建物が明治～大正期の「荷物上屋（貨物上家）」、7号建物が昭和期の「貨物上家」に比定できます。このうち、3・5・7号建物は1区の調査段階ですでに一部が確認されていたもので、今回の調査ではその延伸部分が検出されています。

〈3号建物〉

3号建物は1区の調査段階では、5号煉瓦遺構と7号布基礎状遺構が見えていましたが、今回の調査では2号煉瓦遺構、3・9号布基礎状遺構が新たに検出されました。2号煉瓦遺構はL字状に残る2-1号とその内側に平行する2-2号に分かれています。2-2号は北端部が2-1号によって壊されており、2-2号より2-1号が後出すると考えられます。「油倉庫」はこの2-1号に相当すると考えられるため、2-2号はそれ以前に遡る建物であることが想定されます。しかし、明治30年の図面にはこれに相当する遺構は確認できません。また、3号布基礎状遺構は2-1号煉瓦遺構の基礎構造物（地形）であり、溝状に掘り込んだ布掘りに割栗石が詰められています。その上にコンクリートの礎盤、煉瓦積みが築かれています。なお、この3号布基礎状遺構は掘方が2列に分かれており、本来は2-2号煉瓦遺構の基礎であったものを2-1号を構築する際に拡張して、再利用したと考えられます。

〈5号建物〉

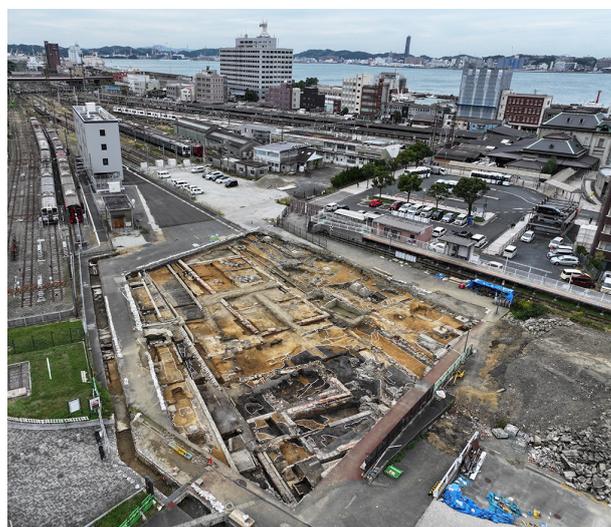
5号建物には2号石垣が相当します。2号石垣の築石は間知石で、近世の石垣とは異なり傾斜を持たず、ほぼ垂直に立ち上がり、裏込めの幅も広くはありません。最上段にある天端石は角柱状に加工されおり、下部の石垣よりも5cmほど外（北）側に張り出しています。また、この上面に付着するモルタルには煉瓦の一部や形が残っており、上部に煉瓦積みがあったと考えられます。また、2号石垣の北東端部には3号コンクリートが接続しています。2号石垣よりも後に造られたものですが、階段2段と2m×1.5mほどの踊り場があり、5号建物の出入口部分と考えられます。

〈6号建物〉

6号建物は今回の調査で新たに確認されたもので、1・4・9号煉瓦遺構から構成されています。1・4号煉瓦遺構は間をコンクリート柵によって隔てられているものの、一連の遺構だと考えられます。また、9号煉瓦遺構は1・4号から5mほど北にあり、これに並行しています。基礎は3号建物とは異なり、割栗石がなく、一部に玉砂利が敷かれているような状況が見られるものの、布掘りに直接コンクリートが打設されています。



第1図 旧門司駅舎跡 2区位置図 (1/25,000)



第2図 旧門司駅舎跡 2区遠景

(東から、右手奥が現門司港駅)

また、6号建物の周囲には、4号石垣および1・2・4・8号布基礎状遺構が配置されています。4号石垣は残りが悪く、わずか5石のみですが、間知石の築石を確認しました。4号布基礎状遺構の上であり、この間をモルタルで接着されています。この4号布基礎状遺構の西側延長線上には1号があり、途中途切れているものの、両者は同一の遺構と考えられます。また、2号布基礎状遺構は割栗石の上面に残るモルタルに間知石の跡形が残っていることから、これらの布基礎状遺構は石垣の基礎であると考えられます。このうち、2・4号は大正5年の図面に描かれる線路の両側に位置していることから、貨物用プラットホームの擁壁だと考えられます。

〈7号建物〉

7号建物は5・7・8号石垣、8号煉瓦遺構で構成されています。5号石垣は1区で確認されていたものの延長線上にあり、そこから8、7号石垣がコの字状に配置されています。石垣は5号建物と同様に全て垂直に立ち上がっており、8号の上面には8号煉瓦遺構が造られています。また、5・7号石垣と交差して、2号溝が確認されています。石垣はどちらも、この溝の部分を残した状態でその上に積み上げられており、先に2号溝が作られ、これを活かしたまま石垣が築かれたものと考えられます。なお、2号溝は7号建物の南側で斜めにクランクしていますが、昭和8年の図面にもクランクする線が描かれており、これに相当するものでしょう。また、5号石垣の南側にある1号石垣は、昭和8年の図面に描かれる擁壁の位置に相当し、5号とは平行しています。図面では、この1・5号石垣の間に線路の引き込みが記されており、列車がここまで進入できたことがわかります。

〈3号石垣〉

3号石垣は1区でも検出されており、その東側延伸部分を確認しました。昨年度の段階で、既に明治期の駅本屋の敷地を囲う外郭の一部と指摘されているもので、2号石垣の下にあり、5号建物の建設によって埋没したものと考えられます。西側でL字状に屈曲し、そこでは間知石が2段確認されました。この2段目は1段目とは異なり不整合な積み方のため、後の積み直しだと考えられます。また、間知石の控えが短く、裏込めもないため、元々1～2段程度しかなかったと考えられます。このことから、石垣は壁面の保護を目的としたものではなく、境界を示すものであったのでしょうか。

3. おわりに

2区の調査でも多くの遺構が確認され、図面資料と照合することができましたが、図面と合致しないものや記載のないものが多く、また、建物名称が不明なものもあり、更なる検討が必要です。

これらの資料を参考に本遺跡の流れを概観すると、本遺跡内で開業当時の建物・構造物としては、1号建物（機関車庫）、6号建物（荷物上屋）、3号石垣があります。本屋の移転に伴って、旧本屋周辺は急ピッチで解体・再編されたことが想像されます。大正3年1月に記されたとされる『旧門司貨物停車場平面図その他』にはすでに新しい建物が記されており、この場所が構内でも利用価値が高い場所であったことを示しています。この段階ではまだ1・6号建物は引き続き使われていますが、旧本屋付近には新たに3号建物（油倉庫）、5号建物（倉庫）などが建築されます。その後、昭和に入って、7号建物（貨物上屋）が建築されますが、これに伴って、5号建物以外は解体されてしまったようです。また、昭和8年の図面には7号建物のすぐ北側に貨物の搬出入用道路（敷石）が造られています。この頃、自動車が急速に普及し始めた時期とも重なっており、時代の流れに対応して構内の建物や配置に変更が加えられていったことを窺わせます。



第3図 3号建物、6号煉瓦遺構検出状況（北から）



第4図 6号建物、2・4号布基礎状遺構検出状況

（空中写真、上が北西）

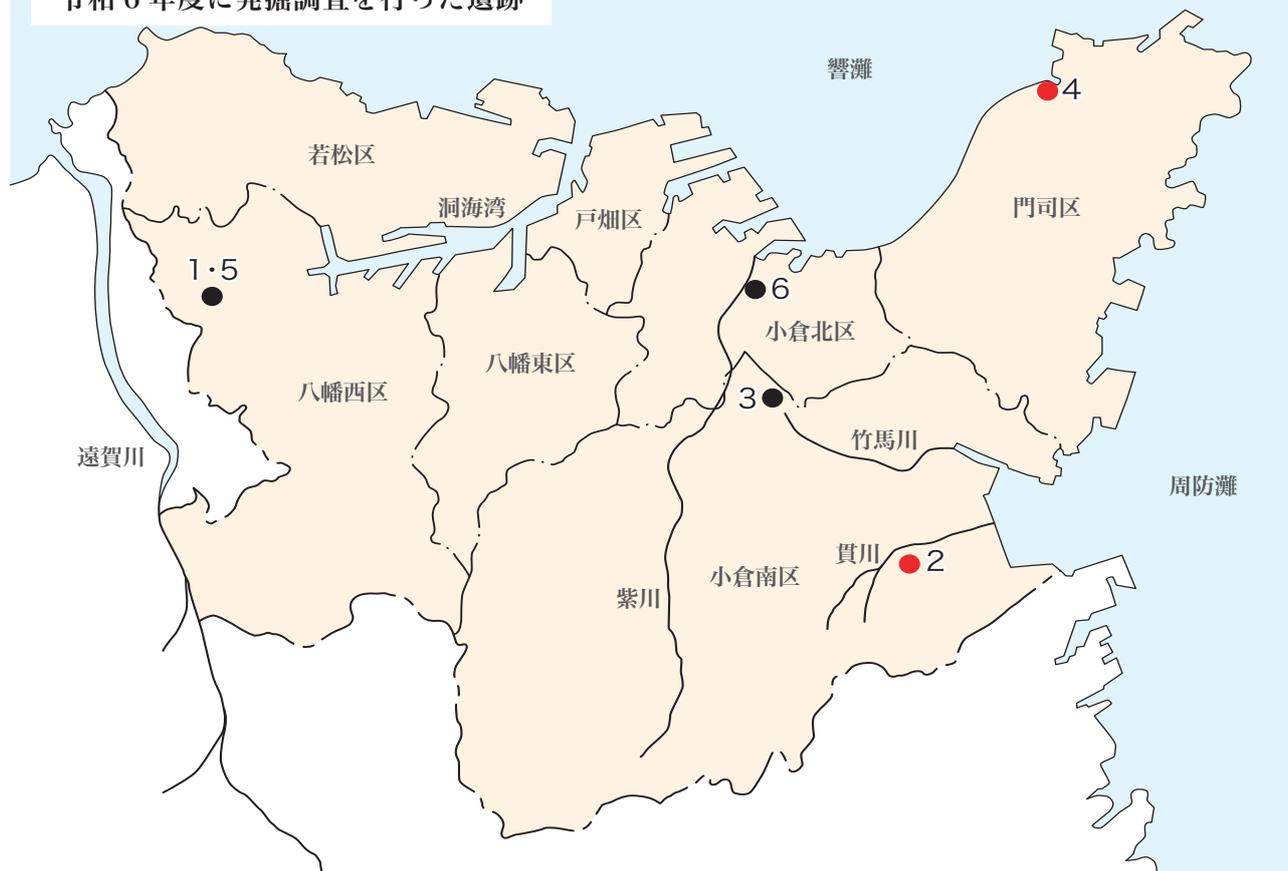


第5図 7号建物、2号溝（南から）



第6図 3号石垣検出状況（西から）

令和6年度に発掘調査を行った遺跡



No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	主な時期と遺跡の内容
1	菅原神社遺跡 10 区	八幡西区堀川町	R6.3.27 ~ 7.5	2300 m ²	弥生時代・古墳時代・中世～近世集落跡
2	貫・裏ノ谷遺跡第 2 地点 4 区	小倉南区大字貫	R6.5.13 ~ 8.16	450 m ²	中世・近世・近代墓地跡
3	城野石橋遺跡	小倉南区城野	R6.7.3 ~ 9.20	1895 m ²	弥生集落跡
4	旧門司駅舎跡 2 区	門司区清滝	R6.8.19 ~ 11.13	770 m ²	近代駅跡
5	菅原神社遺跡 11・12 区	八幡西区堀川町	R6.10.15 ~ R7.2.28	2930 m ²	古代～近代集落跡
6	魚町遺跡第 3 地点 3 区	小倉北区魚町	R6.12.10 ~ R7.2.28	1200 m ²	近世～近代城下町跡

※総面積は 9,545 m²

主催 (公財) 北九州市芸術文化振興財団 埋蔵文化財調査室

〒 803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目 1-3

TEL 093-582-0941 FAX 093-582-8970

北九州市都市ブランド創造局総務文化部 文化企画課